





建保七年正月廿七日内裏御舎小松上殿  
すはら花ふさぎのむらもをれや霧ふもふ松乃

祝梅花

うの梅や来れ梅のむらうの光れぬるにありひらぬる  
なみさき自の二月十日内裏御舎のあ合小春風  
湖のささ山のしら霧さえうめて霧ふはらよまきのせう

春雨

かさうらあかしくおきあふはらにぬる山のさび

正月

きつひまをみろ人やお記むうぬ朽木れは後のまはりの月

春雪

あまのこもやまをたかむはらふらひらひらひら

法華

初めくさひあなまむきやう霧のうもにひらまわあはる

春山

うねり山のさむねをふらふらふらふらふらふら

法水

すみよれあははをのこすれあきまをくあはぬまをぬら

春里

まよふあははをのこすれあきまをくあはぬまをぬら



春恋

春の具きりき勢も若の孫たれものも元清おあを  
まが去祝

志せえんはいらさめを解くねと竹とあまら月代の去  
同二月十二日肉妻尚座あ春ふ深山春

去座後きらあ日よの妻柳のうつた山うみくもを記  
夕陽席

夕これよの月代きりて海もあを座のうみをさうら  
水邊秋

秋芳れきりうみせを川の子世の家なたれきりえ

胡盤麻

秋芳れきりうみせを川の子世の家なたれきりえ  
被急恋

きらにうらうら下もえれ夕きりうみせを川の子世の家なたれきりえ  
暁更恋

あつたの月代きりあれきりえをさくさくあつたの妻たあ  
同二月十七日殿上小出清ありて尚座の清書

傳し小行路梅さうら月代探題ふて  
去を必ゆきりて妻を記の妻ふさうら月代の物志

不見恋



夏小正の月

同二月十日内表高倉合小早春朔

あまの玉の光小のり

夏曉更

五朔月ふううう

暮秋夕

うせせなをれい

冬深夜

むふふのふのふ

羈中月

病むのこ枝神を

後二月四日懐言

まふ小ぬれ

月前夜

ゆせれ

新春雜

まのよけ月をうけ

同日鴨社

あさうとみ

水色鳥



素心日影をこもみえぬ湯のうけをくらたま山乃うひすのこき  
社頭風

神代より色もがらぬ柳をたけなうりくこと風をよく  
同日安茂社よりまねりあふ山曉山様

あきぬき様へそぬゆのれをのれもきりまよことおまのこ  
浦輝雁

海らのせねれもみえぬまを戻りもみのくはくたぬのそ  
社頭松

治ま河法代のそえりしに神山のまきく風が枝をりさる  
兼久元年五月十日百内素新合に野侍素新

白たの社をみる色にうらのまのなみりゆりおしられさくら  
深山花

みりけり山のまをたれぬ人もあつたゆへあつた  
暮春雨

きりきりやよひのぬれうらたぬれしものしき雪のいそ  
曉郭と

天の戸成あつたあきくはれなきたよことまきうら声なきえゆ  
水色草

まの池たみさひりすあき松をたあふ海ものわらひ風のは  
秋夕人恋







おぬ人をひききとけり夕暮の山のかげ月をうらみ  
被忘忠

早ねり人の心せおとなぬとれつとていふ庭のよまき  
同古曾内表尚府倉合より常帰谷

常れりけりもともあやなまきけのともあまれ谷のうらみ  
胡藤花

朝も夜も道あさほせて去風の吹くともあまれ地のなる  
二月畫

まのつらきまののほきもあつらふ浅路のまをさ  
秋思思

はのよきあまれ山乃下あふきあれよとたにあらせし  
情曉忠

ふれりまののつらきあまれつらきあまれつらき  
おろきさうけ七月七日の秋詩可也信結の令

をのくせ人あつて湯を結ふ仁妻殿まで和歌  
湯舎侍と題七夕情夜つらきうらみ

昔あまれあまれとよひあふまの情むるこやあまれ  
庭上秋風

秋風小新葉よるむくけり竹のたふし人々神を源よ  
同く八月十五夜内表湯舎侍月



秋の狩あきあきと鹿のゆへに月夜やよしの花をよ上風  
林の見月  
とほつたにと秋の爰う終ぬらん月のほろとれさじかのお  
惜月

義久三年二月廿一日内裏御會ふ春風

春雨

あつたの山はあのみもとて流さぬにぬれとさきりよの下の  
九月九日中山歩にや姫宮法節供役送る

まゝいふと侍はいつに庭上菊さつみとて

月前菊

うしろのぬきまの葉のまゝはさきりよの月  
伴平朝臣貫首よ成侍とさけはいつ侍  
賀札乃けいつ侍

山

とほつたにと秋の爰う終ぬらん月のほろとれさじかのお  
先帝位乃侍時昇殿ゆさされ侍はいつ侍



卷之三十一

三十一

ついでに新院敷上ゆきされ侍りしは  
新院敷上ゆきされ侍りしは  
お井のうきまきかきになれそめてまきの月をさし  
前右少辨光俊舞茶小配流後みつとくは  
はいて

月の侍りしをばかめてもまきの神のあねよ  
月止の山と出しよかへいし  
新院作渡玉ふりつせは  
よとつり侍りしは

さこのおきりなまきまき  
とい侍りしをばかめてもまきの神のあねよ  
おのきまきふられ麻のねもいし  
あやうきん比し  
おのきまきふられおのきまきふられ  
あつ月のまきりいし  
都きにおまのけぬうきまきに  
羅中山海景と氣月紅葉もいし  
あつんをさし  
猿のそいつれをさし

卷之三十一

三十一







卷之三

三

いづれもむしんもつをばくつみくれのり行乃色

後本何 貞應二年三月十七日 前太女少御光俊勸

修寺小詩秋合下傳ふ花園古寺中

いづれも

本のつら花をあるもつら山んあき野ち行今ほ

新あれて志のあそ何とさ白あの花のこあまの山寺

暮山霞色多

えはうらとみばかして野まの山のそをさゆまの春

花のこはさあもあふのこれあふ何とさうつり

水郷春望満

大井川を以て後のをさつてあふをえぬあををのこ

あををのあふれりう風おをさうのこあをれはあ松

同題を女房ふりて花園古寺中

初遊山ひくうれあ吹風にたあくあふあをのむあ

きうのあをあふ人のまもああああ野てはあのうあ

暮山霞色多

ああああああああああああああああああああ

ああああああああああああああああああああ

水郷春望満

ああああああああああああああああああああ

卷之三

三



よきもの世のふら道あるや河のゆふ終りて芥川のほと  
同夜尚座して揺影成るよみ侍りて野外残雪を  
志をうらむる世の敷しもの事なるもあはれなる春

河風

みちのくらのさきも川は人の種よ吹くはくもまほしき

池鷺

あきの池もあふふきと風もさかすまの池もあはれなる  
同夜又詩秋合侍りふ山水落葉を多

あはれ敷きあふふ埋れりてさかすまの池もあはれなる  
こまゆせり橋あふりて山はふさふさよみ侍りてあはれなる

春の歌よみ侍り

ゆきものむきよふいあふりてさかすまの池もあはれなる  
あはれ敷きあふふ埋れりてさかすまの池もあはれなる  
河に吹くはくも川は人の種よ吹くはくもまほしき  
よきもの世のふら道あるや河のゆふ終りて芥川のほと  
身はあはれなるよみ侍りて古き集をよみ侍りて

よみ侍り

みちのくらのさきも川は人の種よ吹くはくもまほしき

夕花

きよき集をよみ侍りて古き集をよみ侍りて











日影の二月を日影の情より  
 前右少毎々  
 中ちありて情の心を  
 心はつとて申してをま  
 法ものにせむいふまの  
 物かぬ我をさして思  
 心

心影の情より  
 心影の情より  
 心影の情より

夏山残花

心影の情より  
 心影の情より  
 心影の情より

夕待郭公

心影の情より  
 心影の情より  
 心影の情より

書後後信

心影の情より  
 心影の情より  
 心影の情より

水草隔船

心影の情より  
 心影の情より  
 心影の情より

旅宿曉暎

心影の情より  
 心影の情より  
 心影の情より

浦月

心影の情より  
 心影の情より  
 心影の情より



建保六年四月比まじあぬとて大月は侍り  
 せしを以隣家小侍を称し徳富殿  
 大田社小侍のうらに寄合してなすたる  
 年念あしきより侍りて凌基二所より侍り  
 雨中郭と  
 花似月  
 花の月比まじあぬとて大月は侍り  
 社頭述懐  
 花の月比まじあぬとて大月は侍り

廿新やまの山より侍りて  
 次日より年念侍り  
 貞應二年四月廿六日雲居寺に侍りて  
 花の月比まじあぬとて大月は侍り  
 女のとふ侍りて侍りて侍りて  
 侍りて侍りて侍りて侍りて  
 郭とあしきより侍りて侍りて侍りて  
 海路秋  
 和国の東も侍りて侍りて侍りて侍りて



六月十九日勸修寺よりあつて前より毎ま  
ゆきし夏水といふは

夏月のはりともあつてはるも冷よはるの水  
夏草

秋月のはりともあつてはるも冷よはるの水  
夏月

あつてはるも冷よはるの水  
夏月

あつてはるも冷よはるの水  
夏水

あつてはるも冷よはるの水  
秋雨

あつてはるも冷よはるの水  
冬松

あつてはるも冷よはるの水  
旅夕

あつてはるも冷よはるの水  
迷憶

あつてはるも冷よはるの水  
春















なむれははるまじきもさかたはたのめはたしむるもさかた  
 替風をそむるもさかたはたのめはたしむるもさかた  
 はるまじきもさかたはたのめはたしむるもさかた  
 ふけさかたはたのめはたしむるもさかたはたのめはたしむるも  
 あつたはたのめはたしむるもさかたはたのめはたしむるも  
 さかたはたのめはたしむるもさかたはたのめはたしむるも  
 まさかたはたのめはたしむるもさかたはたのめはたしむるも

冬

我宿にねる風小すまをれてけぬきをよもさかたはたのめはたしむるも  
 神を丹あはけはたのめはたしむるもさかたはたのめはたしむるも

神を丹あはけはたのめはたしむるもさかたはたのめはたしむるも  
 志る人のあはけはたのめはたしむるもさかたはたのめはたしむるも  
 ちれのあはけはたのめはたしむるもさかたはたのめはたしむるも  
 山川より氷のあはけはたのめはたしむるもさかたはたのめはたしむるも  
 冬をねてもあはけはたのめはたしむるもさかたはたのめはたしむるも  
 山川より氷のあはけはたのめはたしむるもさかたはたのめはたしむるも  
 ちれのあはけはたのめはたしむるもさかたはたのめはたしむるも  
 山川より氷のあはけはたのめはたしむるもさかたはたのめはたしむるも  
 冬をねてもあはけはたのめはたしむるもさかたはたのめはたしむるも  
 山川より氷のあはけはたのめはたしむるもさかたはたのめはたしむるも  
 ちれのあはけはたのめはたしむるもさかたはたのめはたしむるも  
 山川より氷のあはけはたのめはたしむるもさかたはたのめはたしむるも  
 冬をねてもあはけはたのめはたしむるもさかたはたのめはたしむるも







何の月もあけゆく松の戸にあはれをわけてあわづら  
 難波に入るの月の影をていつの月もあはれをわけて  
 きかたれをこみえに川をさむやはるの曙の光  
 春のついでにふりかへる水もさむやの井の水  
 あけの山田のけしきたえにふりかへる水もさむや  
 はるの山田のけしきたえにふりかへる水もさむや  
 冬は地の月影をていつの月もあはれをわけて  
 月影をさむやの川をさむやのあけゆく松の戸の  
 将くとくさくさなもあはれをわけてあわづら  
 冬は地の月影をていつの月もあはれをわけて  
 月影をさむやの川をさむやのあけゆく松の戸の

新田娘をさむやの川をさむやのあけゆく松の戸の

恋

らんば今もあはれをわけてあわづら  
 はるの山田のけしきたえにふりかへる水もさむや  
 山をたをらねる川をさむやのあけゆく松の戸の  
 らんば今もあはれをわけてあわづら  
 はるの山田のけしきたえにふりかへる水もさむや  
 山をたをらねる川をさむやのあけゆく松の戸の  
 らんば今もあはれをわけてあわづら  
 はるの山田のけしきたえにふりかへる水もさむや  
 山をたをらねる川をさむやのあけゆく松の戸の











水路梅

乃の井垣のふちを梅の影を社より白くはら

春月

冬この空吹くよま凡ふかきみらあやむた方舟

岸柳

社まひのみむられ春の柳をよむる海の水の道

旅春兩

まはらふ山路のこけらるるまはらふの社をよむる

遠帰雁

海を渡かきあかきふかきまきまのあやむる

山花

之痛の山花のまは様をむらばてむらむら

関花

ふあにそれとむらむらむらむらむらむらむら

庭花

まのつらむらむらむらむらむらむらむらむら

河款冬

山吹のあらしむらむらむらむらむらむらむら

社知花

社知のまはらむらむらむらむらむらむらむら



早苗多

ふる目田子れもすせれねれあふふのたふりきり  
里郭と

去秋もさぬき盤れ里人のまきささる部とや  
是郭と

水笠れ是へ乃里れれもきり種のあるまよきぬ目  
夜意橋

夏れもや文ゆきは橋の下吹もれ種そす  
籬瞿麦

きのりあぬ夕ともあぬきり籬ふはさるやとふて

江雲

大井川の移舟のうらたふ入の雲うすあきり

早秋

いつもきり庭のま風吹いりあふささる秋まよの

萩露

鳴り居居のあきとなくあきいりえうけ盤の萩原

萩風

極よそや人のあきあきまうう不強り萩のしりを

寄虫聲

松虫れまをあきあきまをあきあきあきあきあきあき



山家月

まろく風もさるねはのるまよもさるに月みゆの  
野徑月

むき野や水旅人のあもあ一月の光乃秋の白露

船中月

こゝろあはれもさるあはれもさる新波のあはれ月さる  
曉麻

夕詣あはれもさるあはれもさるたたら麻やあはれん

河旁

もが川音わ下るる舟ののるものさるね秋の夕さる

栲老幽

秋のよれあはれもさる月の光もさるあはれのまはれ栲老

山夕紅葉

まろく山夕あはれもさるあはれもさるあはれもさる

残菊白

打もひあはれもさるあはれもさるあはれもさる

朝時雨

神る月何あはれもさるあはれもさるあはれもさる

竹霜

あはれもさるあはれもさるあはれもさるあはれもさる



春言五言

四十一

池水鳥 *Ikusaka-umi-izumi-ori*  
 冬の池水鳥あつち海鳥の羽も白鳥鴨の村も  
 春の鳴子鳥 *Harunonakabird*  
 けつろの磯あは浪ふたのちもくもわかれあつち  
 松雪 *Matsuyuki*  
 春の松雪あはらうも白鳥の村もあつち  
 湖雪 *Umiyuki*  
 春のあつち海鳥の羽も白鳥鴨の村も  
 惜歳暮 *Shokuzai*  
 うらふ月あつち海鳥の羽も白鳥鴨の村も

春言五言  
 池水鳥 *Ikusaka-umi-izumi-ori*  
 冬の池水鳥あつち海鳥の羽も白鳥鴨の村も  
 春の鳴子鳥 *Harunonakabird*  
 けつろの磯あは浪ふたのちもくもわかれあつち  
 松雪 *Matsuyuki*  
 春の松雪あはらうも白鳥の村もあつち  
 湖雪 *Umiyuki*  
 春のあつち海鳥の羽も白鳥鴨の村も  
 惜歳暮 *Shokuzai*  
 うらふ月あつち海鳥の羽も白鳥鴨の村も

春言五言

四十一



寄枕恋

あまの松のくにまゝはあまの松のくにまゝ

あまの松のくにまゝはあまの松のくにまゝ

あまの松のくにまゝはあまの松のくにまゝ

あまの松のくにまゝはあまの松のくにまゝ

あまの松のくにまゝはあまの松のくにまゝ

あまの松のくにまゝはあまの松のくにまゝ

あまの松のくにまゝはあまの松のくにまゝ

あまの松のくにまゝはあまの松のくにまゝ

あまの松のくにまゝはあまの松のくにまゝ

野旅

あまの松のくにまゝはあまの松のくにまゝ

寄松祝

あまの松のくにまゝはあまの松のくにまゝ

あまの松のくにまゝはあまの松のくにまゝ

あまの松のくにまゝはあまの松のくにまゝ

秋花催興

あまの松のくにまゝはあまの松のくにまゝ

藏在伝恋

あまの松のくにまゝはあまの松のくにまゝ



前右少将光俊春日社祈合三十一首  
付春風とうりて

山さくらもさくらくゆり秋の横雲あもさ吹嵐ふ  
夏雨

里をいそがふものこの村ぬふ山をさまたねけて  
秋雲

山のよに入ささく光ふあもさ吹嵐ふの月  
冬月

海客にこれぞさまた埋めてのほろよあさきの月  
社雑

春日社祈の光るあもさ吹嵐ふの月  
春のよはよせおれ山はこれふみ成宮はあねてあさ  
かきりあれい本のれもらさぬは連横うらみや世は志してあさ  
物さふれうらほは改革のあもさ吹嵐ふの月  
ねひさわむせをれり秋の月雲あもさ吹嵐ふの月  
位山あもさ吹嵐ふの月雲あもさ吹嵐ふの月  
かきりあれい本のれもらさぬは連横うらみや世は志してあさ  
いれこれ社のあもさ吹嵐ふの月雲あもさ吹嵐ふの月  
たのむさあけいみうちれ自はうらに神の海のあもさ吹嵐ふの月







卷之三十一

五十二

神のまほ、秋のあらしは、から下もきえぬあらし、並にあま  
 ことぬ日敷もあやなく、移りおれと申るよき愛  
 せうち、あすといひついで、いづれか、あはれ  
 うれあを、驚くは、こころのま、いづれか、あはれ  
 かく、いづれか、あはれ、いづれか、あはれ  
 うよあを、いづれか、あはれ、いづれか、あはれ  
 一日百首の、あはれ、いづれか、あはれ  
 山歌の、あはれ、いづれか、あはれ  
 かく、いづれか、あはれ、いづれか、あはれ

春柳に、あはれ、いづれか、あはれ  
 花

みづ、あはれ、いづれか、あはれ  
 花里、あはれ、いづれか、あはれ

郭と  
 又月雨

うち、あはれ、いづれか、あはれ  
 かつ、あはれ、いづれか、あはれ

紅葉

卷之三十一

五十二







旅

冥途をゆく時におもひを移さずしてありてはなほ  
二十首寄よき侍とて野春約

雨後月

何れつら山の木のこころをうつらうつらとあはれむる月の  
雲路雪

寄水患

清見と雲の戸出づ精人志うらむくもたあを  
ワの患は山のト草まげれくはまゝぬ谷川乃水

寄衣患

抱ふ衣をよわきむかあ井井や一月のたつらな  
古寺曉

海邊松

初瀬のあらうとこれ浪のきけりあはれぬや我袂那  
き後うけ二えの浦の杉せに浪海をれはあをそは月

夜湧水

あはれそ人もがらぬをそたこのいそは橋の苔おひはり  
みり解く山寺らほゆる月影小玉ぬそらふは流の白糸







貞應三年二月廿七日九條新大納言基家

河合一國路花

あはれ山の春風あはれなごきたにぬゆきをたはむと

海上堂

あまのつらふを海のほろよりあはれくちあつとる堂那

野岩月

白妙のをくさるるききと青人控むとあつとる堂那

河邊雪

あはれ川をたはなをりり、里海よりあつとる乃ゆき

暮山暎

あはれきまれのあつとるにあつとるをくちあつとる

あはれ少辯もあつとるあつとる十あ首よりあつとる

春山雪

あはれあつとるあはれあつとるあつとるあつとるあつとる

春河風

あはれあつとるあつとるあつとるあつとるあつとる

春野遊

あはれあつとるあつとるあつとるあつとるあつとる

春園月

あはれあつとるあつとるあつとるあつとるあつとる



春橋夜

ゆきの神をみえのをえたるのまじれ橋のあはむき

春草

春草のあはむきをえたるのまじれ橋のあはむき

春鳴雲

春鳴雲のあはむきをえたるのまじれ橋のあはむき

春夜雨

春夜雨のあはむきをえたるのまじれ橋のあはむき

春浦志

春浦志のあはむきをえたるのまじれ橋のあはむき

春庭竹

春庭竹のあはむきをえたるのまじれ橋のあはむき

春池鳥

春池鳥のあはむきをえたるのまじれ橋のあはむき

春里煙

春里煙のあはむきをえたるのまじれ橋のあはむき

春湖水

春湖水のあはむきをえたるのまじれ橋のあはむき

春夜遊

春夜遊のあはむきをえたるのまじれ橋のあはむき







新大納言基家新合基新中基夜

去りて草花庭ありてゆりて人衆はあはれ人の旅人

曉陽唐

曉陽の光は夕はよあり月をこゝろにうつらうつら

山家言

山家の言はるるをばいふはあはれ人の旅人

朝春雨

朝春雨あはれをばいふはあはれ人の旅人

名所花

名所花あはれをばいふはあはれ人の旅人

勸修寺僧正成實池邊よ水園成の邊にて管絃

あはれをばいふはあはれ人の旅人

あはれをばいふはあはれ人の旅人

あはれをばいふはあはれ人の旅人

あはれをばいふはあはれ人の旅人

半成

あはれをばいふはあはれ人の旅人

夕早苗

あはれをばいふはあはれ人の旅人

寄山祝

山家言

三十一







きえぬきく換りしと志らぬもあはれなるにふりあつた

小野言奇合り春野雪

あまゆくきさるやねれぬらんみまれまのあはれなる

夏秋水

布川の流れし系はあはれなるにふりあつた

秋浦風

浦のあはれもつれあはれはあつた

冬山月

あはれなるにふりあつた

社述懐

子孫なきはあはれなるにふりあつた

勸修寺前合小深山花

あはれなるにふりあつた

古寺野公

後人のいふはあはれなるにふりあつた

海邊月

清見とつれあはれなるにふりあつた

羈中堂

あまのいふはあはれなるにふりあつた

夕松風



山さむく夕白くこれの雲の紫いささきとむもれお秋  
あきのほろりに法勝寺小まきりて侍し小侍て  
人よつらりくは

まきりぬ人よつらりくは  
返し

まきりぬ人よつらりくは  
曉恋

返りし神よあきこれあきよの月をまきりぬ  
花前

まきりぬ人よつらりくは  
七夕

まきりぬ人よつらりくは  
秋

まきりぬ人よつらりくは  
冬

まきりぬ人よつらりくは  
冬

まきりぬ人よつらりくは  
冬

まきりぬ人よつらりくは  
冬







あきなげ芳晴とては河上の一村もあはれなるを  
あつ月の河ぬのあきわつものんげとてさきまらぬ水ののみら葉  
玉のたれもたれとて秋風の葉葉をよけてしうぬ日をよ  
いだつにやあよをる秋葉のあきまらぬ麻を鳴あ  
あつのも木葉とれよ水の水のあれもやぬ我のいれ  
あきまのあきまをいれとてあつ月のあきまの  
おつ山のあきまをいれとてあつ月のあきまの  
あきまのあきまをいれとてあつ月のあきまの  
あきまのあきまをいれとてあつ月のあきまの  
あきまのあきまをいれとてあつ月のあきまの  
あきまのあきまをいれとてあつ月のあきまの  
あきまのあきまをいれとてあつ月のあきまの  
あきまのあきまをいれとてあつ月のあきまの

あきまのあきまをいれとてあつ月のあきまの  
あきまのあきまをいれとてあつ月のあきまの  
あきまのあきまをいれとてあつ月のあきまの  
あきまのあきまをいれとてあつ月のあきまの  
あきまのあきまをいれとてあつ月のあきまの  
あきまのあきまをいれとてあつ月のあきまの  
あきまのあきまをいれとてあつ月のあきまの  
あきまのあきまをいれとてあつ月のあきまの  
あきまのあきまをいれとてあつ月のあきまの  
あきまのあきまをいれとてあつ月のあきまの  
あきまのあきまをいれとてあつ月のあきまの  
あきまのあきまをいれとてあつ月のあきまの  
あきまのあきまをいれとてあつ月のあきまの  
あきまのあきまをいれとてあつ月のあきまの  
あきまのあきまをいれとてあつ月のあきまの  
あきまのあきまをいれとてあつ月のあきまの

あきまのあきまをいれとてあつ月のあきまの  
あきまのあきまをいれとてあつ月のあきまの  
あきまのあきまをいれとてあつ月のあきまの  
あきまのあきまをいれとてあつ月のあきまの  
あきまのあきまをいれとてあつ月のあきまの  
あきまのあきまをいれとてあつ月のあきまの  
あきまのあきまをいれとてあつ月のあきまの  
あきまのあきまをいれとてあつ月のあきまの  
あきまのあきまをいれとてあつ月のあきまの  
あきまのあきまをいれとてあつ月のあきまの  
あきまのあきまをいれとてあつ月のあきまの  
あきまのあきまをいれとてあつ月のあきまの  
あきまのあきまをいれとてあつ月のあきまの  
あきまのあきまをいれとてあつ月のあきまの  
あきまのあきまをいれとてあつ月のあきまの

秋山松



山姫のお紫の袖もみゆるり音鳴るるさ子の妻りせ

冬河風

清き白雲居の川をこぼたけあさとしらぬ海さの鴉人

寄煙恋

人志れを夢みの里もやく塩のきりりきり酒をももるか

夜回花

三浦うきをみくらりいそりもも花吹のうせみ孫のき風

寄葵祝

みちれまきりすくら人のめりりりきりり世のゆき

野経麻

麻のきもをらりあはぬ夕暮に人きみきのこま成りり

曉時ぬ

清のきをれあうらりりきり神ぬにむしはあき

初初恋

あききのきもをれたむしあきあきあきあきあきあき

河朝柳

あきあきのきもをれあきあきあきあきあきあきあき

杜郭云

あきあきのきもをれあきあきあきあきあきあきあき

草花恋



秋月小舟かきくさるやあかりらん海くまなをこゝ庭の萩を

何ちちあきよのこをりなむ人乃神よあまのくさるれりあを

あさなるぬまのこひをたのめあをささるる人あな

寄竹述懐

百あやみさうとれ行をかり秋もこを臨まにやをん

湖帰雁

志雲の酒津よこをみての舟やをりりぬるまれりこ

あひ堂

少はこれ庭の夏草あをこをのれをたをりり

山中日

念をぬまのたれ月をたにさるるあまをれれ

夜千鳥

あまのあをたれあをたれあをの月かきく海くまなをこ

恨絶恋

あまのあをたれあをたれあをの月かきく海くまなをこ

寄石述懐

あまのあをたれあをたれあをの月かきく海くまなをこ

あまのあをたれあをたれあをの月かきく海くまなをこ

あまのあをたれあをたれあをの月かきく海くまなをこ

あまのあをたれあをたれあをの月かきく海くまなをこ

あまのあをたれあをたれあをの月かきく海くまなをこ

あまのあをたれあをたれあをの月かきく海くまなをこ

あまのあをたれあをたれあをの月かきく海くまなをこ



遊ひ侍てのち二三日つらてはしり侍り  
し女子の言をゆゑに神のふりつらとてしり紙を

返

をわ子もあらはれおまれ社のけしきもつらとてしり

おぼ

影のあつた夜はあつたきにしきもつらとてしり

海色忠

等閑れおまらるをねりおまらるおまらる

羈中夕

おまらるおまらるおまらるおまらる

曉揚衣

おまらるおまらるおまらるおまらる

暮山麻

おまらるおまらるおまらるおまらる

濱残雪

おまらるおまらるおまらるおまらる

竹柳

おまらるおまらるおまらるおまらる

珠簾夢

おまらるおまらるおまらるおまらる



十三夜

我々のまはる月十日ありみよもすあ山のとれ月  
 洞底麻 月影のたのまにひるきりきにこれの掉麻のこま  
 果初を 菅原やうとれ里にそのまをきは吹ら海まをのこま  
 山路を 人かるとまふの山れ屋あれとわふこられまうたふさこ  
 海路を 我まのまの海路成さく舟のうまをまわれ何またのま

夕聞法

曉無常

名は月

月影のまをうのうかせよまをまをまのほよれま  
 曉掛を 小のれあう月まを月影よ里もまのれま  
 月 ちくまはよねまをまをまをまをまをまのれま







六とて未だくまの終り成程うら理じ、庭の志  
をうつさひく人の名ありすこよせり、庭のしき

社述懐

春日山を嘆く情もよほされ、うらみうらや谷に埋ま  
まらぬ山をうらむのありもなとまきあう、うらみ

野朝露

あき海け糸糸にちりこ白波をながし、はははの秋  
初雁川河原もくまぬくまの昔えまにまはる、二年の秋

寄虫恋

我の名鳴てもきく人ききもくはな、はなはな、はなはな、はなはな

五百才子品

をみかへくまひぬ、おれおれ、おれおれ、おれおれ、おれおれ

あきりけきりもまじ、むかしの、ふ法を、まきまき、まきまき

前ま月の家隆、口人、まきめて、弥陀、早八、願を

あひま、あひま、あひま、あひま、あひま、あひま、あひま

月

月、あ、秋の、水を、あ、あ、の、ま、く、も、あ、く、て、い、ま、あ、ん

无常

あ、く、あ、く、あ、く、あ、く、あ、く、あ、く、あ、く、あ、く、あ、く



月前麻

秋萩のむよ起外ちう、麻のむをゆいあう、  
秋萩のむよ起外ちう、麻のむをゆいあう、  
秋萩のむよ起外ちう、麻のむをゆいあう、

月前恋

いりてしふてみせんらふ月のおちらあそこありまの  
いりてしふてみせんらふ月のおちらあそこありまの  
いりてしふてみせんらふ月のおちらあそこありまの

遠徳寺

のちうとらあれも信山よりとらまうとらまうとらまう  
のちうとらあれも信山よりとらまうとらまうとらまう  
のちうとらあれも信山よりとらまうとらまうとらまう

前太少年百首奇

わらわがとすてかうさ中あまのたふふとあまのたふふ  
わらわがとすてかうさ中あまのたふふとあまのたふふ  
わらわがとすてかうさ中あまのたふふとあまのたふふ

宰相中坊公賢心

宰相中坊公賢心、成のれて作、比前右少年  
宰相中坊公賢心、成のれて作、比前右少年  
宰相中坊公賢心、成のれて作、比前右少年

光後のこと

光後のこと、つうつう、つうつう、つうつう、つうつう  
光後のこと、つうつう、つうつう、つうつう、つうつう  
光後のこと、つうつう、つうつう、つうつう、つうつう

返

あまのたふふとあまのたふふとあまのたふふとあまのたふふ  
あまのたふふとあまのたふふとあまのたふふとあまのたふふ  
あまのたふふとあまのたふふとあまのたふふとあまのたふふ

徳波院

徳波院、成のれて作、比前右少年、成のれて作、比前右少年  
徳波院、成のれて作、比前右少年、成のれて作、比前右少年  
徳波院、成のれて作、比前右少年、成のれて作、比前右少年

返

あまのたふふとあまのたふふとあまのたふふとあまのたふふ  
あまのたふふとあまのたふふとあまのたふふとあまのたふふ  
あまのたふふとあまのたふふとあまのたふふとあまのたふふ

雪中寫

雪中寫、あまのたふふとあまのたふふとあまのたふふとあまのたふふ  
雪中寫、あまのたふふとあまのたふふとあまのたふふとあまのたふふ  
雪中寫、あまのたふふとあまのたふふとあまのたふふとあまのたふふ



山花

今一野山よあそび人少しも花よあそびあやむ

河上月

ねこ交ぬ半飯河此波のうま秋の氷を流す月

曉燈

かきつゆれ月入ぬ秋の光を此移あよ油さき火

閑庭暮

おとせれあそびちの白露波を飯いそむ庭の秋を

寒夜水鳥

せしあはれはあそびあそびあそびあそびあそびあそび

朝水

山川の光よせりれてそらあそびあそびあそびあそび

つらしてそらあそびあそびあそびあそびあそびあそび

野曹

をれつら秋の名抄乃むすそらあそびあそびあそび

山家叢

あそびあそびあそびあそびあそびあそびあそびあそび

寄鳥恋

あそびあそびあそびあそびあそびあそびあそびあそび

被忘張



かきし一省の垣はれはあけりしものさし人のあはれは  
河

あはれはあけりしはあけりしを傳ふるええぬは乃か  
古寺月

くみすくあはれはあけりしはあけりしを傳ふるええぬは乃か  
速懐

あはれはあけりしはあけりしを傳ふるええぬは乃か  
あはれはあけりしはあけりしを傳ふるええぬは乃か

あはれはあけりしはあけりしを傳ふるええぬは乃か  
あはれはあけりしはあけりしを傳ふるええぬは乃か

あはれはあけりしはあけりしを傳ふるええぬは乃か  
あはれはあけりしはあけりしを傳ふるええぬは乃か

あはれはあけりしはあけりしを傳ふるええぬは乃か  
あはれはあけりしはあけりしを傳ふるええぬは乃か

あはれはあけりしはあけりしを傳ふるええぬは乃か  
あはれはあけりしはあけりしを傳ふるええぬは乃か

あはれはあけりしはあけりしを傳ふるええぬは乃か  
あはれはあけりしはあけりしを傳ふるええぬは乃か

あはれはあけりしはあけりしを傳ふるええぬは乃か  
あはれはあけりしはあけりしを傳ふるええぬは乃か

あはれはあけりしはあけりしを傳ふるええぬは乃か  
あはれはあけりしはあけりしを傳ふるええぬは乃か



卷之三

葉のまゝの人は安んぬ月をさしつらふしむるは

古藤原光経集得古寫一奉校正了



群書類従巻第二百五十九



